

# 引用形式の複合辞への転成について

藤 田 保 幸

## 一、はじめに

1 複合辞には、引用形式（引用句「／」と「いう」等の結びついた連語）に由来するものが少なくないことは、これまでも指摘されてきた。

助詞的複合辞に限っても、例えば「いう」を述語とする引用形式由来のものとして、少なからぬ複合辞をあげることができる。

／といえ／／という

／（から）といって／／といっても

／とはいえ／／とはいふものの／／とはいいながら

／といえども

／といい…といい

／というN「名詞句」

あるいは、「思う」を述語とする引用形式由来の複合辞には、次のようなものがある。

／と思うと／／と思えば／／思ったら

また、「する」は(1)のように引用句「／／と」と結びついて引用形式を形成する述語として用いられる。

(1) 会社側は、完全復旧には二ヶ月ほどかかるとした（／／としている）。

このような用法を考え合わせると、次のような複合辞は、「する」を述語とする引用形式に由来するものと考えられよう。

／とすれば／／とすると

／として

／としても

等々

これらには、(2) (5)のように、文的な語列を承ける用法があり、引用形式との連続性は容易に見てとれる。

(2) 韃靼がカムチャツカ半島に至ったとすれば、そのルートはこの逆だったことだろう。

(菊池俊彦「オホーツクの古代史」)

(3) したがってチャールズ卿が敷地内を散歩したとすれば、並木道まで少なくとも一〇〇メートルどころか、数百メートルはあるはずである。

(木村申二「シャーロック・ホームズ鑑賞学入門」)

(4) それでは、犬を飼うとして、世話はいつたい誰がするのだ。

(5) 少なからぬ困難が予想されるとしても、計画は実行に移さなければならない。

右のとおり、引用形式由来の複合辞というべきものは、確かにかなりいろいろ見いだすことができる。しかし、何故特に引用形式からこうした複合辞がいろいろ生まれることになるのかという点については、従来きちんと論じられたことはなかったかと思う。この稿では、その点について考えてみたい。

以下では、まず「いう」「思う」「する」がどのように複

合辞に転成するのか、その筋道をそれぞれ例をあげて考えてみる。引用形式から複合辞への転成の筋道については、既に藤田(二〇〇〇)でいくらか検討したが、この稿では、その検討もふまえ、現在の考え方に即して論じておきたい。そして、そうした考察を通して、引用形式から複合辞がさまざま生まれるのには、それなりの契機というべきいきさつがあり、そうなる所以のあることであるということを述べる。

なお、引用形式から助動詞的複合辞への転成については、藤田(二〇〇〇)で立ち入って論じたので、この稿では助詞的複合辞への転成について考えることにする。

## 二、「いう」「する」を述語とする引用形式の複合辞への転成

2-1 以下、引用形式からどのように複合辞が生まれているかという点について、具体的な例に即して考え、引用形式の複合辞への転成の経緯を論じてみたい。

まず、「いう」を述語とする引用形式に由来する複合辞について見てみることにする。代表的な例として、「〜と

いえば（／という）「／といっても」を取り上げて考える。

(6) ー a マルタ・アルゲリッチといえ、世界最高のピアニストの一人だ。

(7) ー a 事故があったといっても、大したことはない。

これらの「いう」は、動詞としての実質的な意味が稀薄になっており、次のとおり、その意味を詳しく説明する修飾語や、その動作の主体を示す主語を添えることができない。

(6) ー b \*マルタ・アルゲリッチとはっきりいえ、世界最高のピアニストの一人だ。

(6) ー c \*マルタ・アルゲリッチと筆者がいえ、世界最高のピアニストの一人だ。

(7) ー b \*事故があったと今いっても、大したことはない。

(7) ー c \*事故があったと私がいっても、大したことはない。

更に言うなら、右のような割り込みを許さない点でも、「／といえ」／といっても」はひとまとまりの複合辞となっているといえる。

さて、こうした「／といえ」／といっても」の述語

部分の「いう」が実質的な意味を稀薄にしていることと相応じて、これらは、引用形式としてどこかで発言されたと思なされる所与のコトバを引き写して、発言行為を描き出すといった引用表現の本質をも乏しくしたものになっているといえる。そうした本質が乏しくなって、これらは、その場でリアルタイムにある言葉を持ち出したり、ある言い方をしながら、そのような言葉を持ち出すこと・そのような言い方をするに自ら言及する言い方になっている。つまり、(6)の「マルタ・アルゲリッチといえ」の場合なら、「マルタ・アルゲリッチ」という言葉をこの文の叙述に際してこの時持ち出してきておいて、その「持ち出し」てきたことを「といえ」と同時に自ら言及しているといえるし、(7)の「事故があったといっても」の場合は、「事故があった」という言い方をこの文の叙述でこの時しておいて、そのような「言い方をした」ことについて「といっても」と言及しているわけである。してみると、こうした「／といえ」／といっても」の「いう」は、発言行為を表す動詞としての実質的な意味が稀薄化して、言葉を持ち出す・そのような言い方をする（そのような言葉を操る）といった抽象的な意味を示すものに転じてしまっている

考えられる（以下、こうした抽象的な意味について、「持ち出し」「操作」といった言い方で言及することにする）。

また、このように言葉を持ち出したり操作したりするのは、第一義的には、その文の話し手である。こうした言い方が、その文において用いられる以上、それは自明のことである。しかし、そのような「話し手」は、文表現の表側には「顔を出さない」、つまり言語化されることはない。

主語が自明でもはや言語化されないものになることによって、「～といえば」「～といっても」の「いう」は主語がとれないものとなり、動詞としての基本的な性質を失ったものとなってしまつて、「～といえば」「～といっても」でひとまとまりの辞的形式に転じているわけである。

右のとおり、「いう」を述語とする引用形式は、意味が抽象化・稀薄化すること、（表に出ることのない話し手が）言葉を持ち出したり操作したりしながら、同時にそうしていることに言及するというようなことを示す形式に転じ得るものである。「いう」を述語とする引用形式であることにおいて、こうした方向への転成の契機を既に孕んでいるのだといつてもよい。

そして、そもそも文表現は、話し手が言葉を持ち出した

り操作しては、それをまた他の言葉に関連づけて、形作られていくものである。この点、「いう」を述語とする引用形式は、言葉を持ち出したり操作したりしつつ、同時に話し手がそうしていることに自ら言及する形式に転じ得るものであるが、更にこれは持ち出され操作された言葉を以下の言葉とどう関連づけるかを示すものともなり得る。つまり、「～といえば」「～といっても」で言えば、これらの「といえば」「といっても」は、「～」という言葉を持ち出し操作しておいて、以下と更にいろいろに関係づけることを「～れば」「～ても」のような形で表すもの——要するに、話し手の言葉と言葉の關係づけを表す辞的形式として利用されることになるのである。

「いう」を述語とする引用形式に由来する他の複合辞についても、基本的に同様の転成の経緯を考えてよいだろう。接続助詞的な「～とはいへ」「～といえども」等や「～といつても」「～（から）といつて」は、「～」という言葉を持ち出し、あるいはそんな言い方をしておいて、それを逆接的に、もしくは、その言葉から推論されることを否認する形で、後件に結びつけるものといえる。いずれも「いう」の実質的な意味が稀薄になつて、言葉を持ち出す・操

作するといった意味合いが表立つものとなり、そのような意味合いの言い方である故に、それが言葉と言葉との関係づけを表す表現として使われることになるわけである。

また、「〜といい……といい」は、次のように一種の並列列記に用いられるが、

(8) この天目茶碗は、色といいつやといい、見事な逸品だ。

「いい」にももちろん実質的な意味はなく、「といい」がまさに話し手が言葉を持ち出して関係づける営みそのものを表すものとなっている。そうした「〜といい」が繰り返されることで、言葉を繰り返して持ち出してくる列記の表現が形作られることになる。

更に、連体修飾に出てくる「〜という」も、「いう」に実質的な意味は乏しくなり、「〜」という言葉を持ち出して以下の名詞に関係づけるための形式になっている。

(9) 中野という人／クマが出たという知らせ

このように、「いう」を述語とする引用形式は、「いう」の意味が稀薄化して言葉を持ち出したり操作したりするような意味を表すものになることで、話し手が言葉を持ち出したり操作したりして関係づける営みを表す形式、つまり

引用形式の複合辞への転成について

辞的形式としてごく自然に利用されることになる。「いう」を述語とする引用形式から、文における関係の意味を表す複合辞がいろいろ生まれてくることには、それなりにそうなる所以があるといえる。

2-2 次に、記述の便宜上「する」を述語とする引用形式から転成した複合辞について見てみることにする。例として、次のように接続助詞的に用いられる「〜として」をとり上げる。

(10) a 明日の準備はこれでいいとして、まずはゆっくり休むことだ。

(11) a 仮に富士山が噴火したとして、その被害は予想もつかない。

こうした「〜として」については、既に藤田(二〇〇三)で論じたが、主語もとれず形も固定化して、はっきり複合辞化している。これらの「〜として」は、(10)なら「物事の取り扱いについての考え方」、(11)なら「仮定の事柄」を表すものといえるが、大きく一括すれば「話の前提」を示すものといえることができる。

そして、こうした複合辞「〜として」は、次のような「〜とする」表現と、明らかに連続している。

(12) a 正三角形Aの一边の長さは6cmとする(／としよう)。

↓ b 正三角形Aの一边の長さが6cm(だ)として、Aの面積を求めよ。

(10) b 明日の準備はこれでいいとしよう。まずはゆっくり休むことだ。

(11) b 仮に富士山が噴火したとする。その被害は予想もつかない。

(12) aのような「／とする」は、ある事柄内容をそれとして設定するものだといえる。これも引用表現に連続するものではあるが、事柄内容を言葉にして設定しつつ、同時にそのように設定していることに「／とする(／としよう)」とリアルタイムに言及する言い方である。そして、こうした「／とする」は、話し手のみならず、この話を受け入れる者は皆そう「する」ことになるから、主体が誰と具体的に決まらず、主語が立たなくなっている。その意味で、具体的誰かの発言・思考を描く引用表現から既に逸脱しているが、更にそれが「／として」のような形で使われると、この「／として」に含まれる「する」は、もはや主語がとれないという点で具体的な誰かの動作を表す動詞としての

性格が乏しく、「／として」はある事柄内容を設定して以下にその前提として関係づけるといった関係表現に転じているといえる。「／とすると」「／とすれば」や「／として」も、何らかの事柄を設定し、以下にその前提として結びつける言い方という点では、同様の転成の筋道を考えてもいいだろう。

このように、「する」を述語とする引用形式は、何らかの事柄を設定する言い方として用いられるものであり、その場合「する」に動詞らしさが乏しくなると、何らかの事柄を設定して関係づける形式に転じ得る。「する」を述語とする引用形式であることにおいて、既にこうした方向へ転成する契機を孕んでいるものといってもよい。そして、そもそも言語表現においては、何らかの事柄内容を設定したうえで、それを他の事柄と関係づけて述べていくということは、ごくふつうに行われることである。そのための関係表現として、「する」を述語とする引用形式から、複合辞がいろいろ生じてくることも、やはりそれなりの所以のあることといっていよい。

2-3 更に、次のような名詞句を承ける複合辞も、「する」を述語とする引用形式由来の複合辞の一環として考え

られそうだが、これらも以上のような見方の延長上にその表現性を説明することができるだろう。

(13) 山本氏は、オブザーバーとして会議に加わった。

(14) 佳那は、ペットとしてクマを飼っている。

(15) 麻黄は、昔から解熱剤として使われてきた。

こうした名詞句を承ける「～として」は、もちろん「と」＋「する」＋「て」から出来た複合辞であり、グループ・ジャマシイ（一九九八）では「資格・立場・部類・名目などを表す」（三三七頁）とされるが、端的に言えば、何らかの「位置づけ」を表すものといってよい。そして、「位置づけ」とは、当該のものをこれこれと設定し規定することであるから、ここにも「設定」（規定）を表す「～とする」との連続性を見てとってよい。物事を「位置づけ」することは、言葉による基本的な叙述の仕方の一つであるが、そのために「設定」を表す「～とする」と連続する「～として」のような形式があることは、十分その所以のあることなのである。

あるいは、次のような名詞句を承ける提題的な「～としては」「～としても」もあるが、同じくグループ・ジャマシイ（一九九八）では、人物や組織を表す名詞に付いて

引用形式の複合辞への転成について

「その立場・観点から言えば／考えると」「その立場・観点からも」といった意味を表すとしている（三三七～三三八頁）。

(16) 私としては、山崎案に絶対に賛成です。

(17) こんなことになっては、警察としても、見逃すわけにはいかない。

これらは、それぞれ「私は」「警察も」としてもほぼ同義で、一種の提題的な言い方といえるが、「Nとしては」「Nとしても」の形をとって、以下述べる見解・対応・認識の主体が他ではないNであるという意味合いを殊更うかがわせる言い方になっている。これは、「～としては」「～としても」の「～として」がやはり「設定」の意味の「～とする」表現と連続するものであり、いわば「主体ヲNト設定シタ場合ハ（ノモ）」というような含みを感じさせることから、「他デハナイN」というような、他と殊更対比してNをとり上げる意味合いを感じさせるものと考えられる。

以上のように、名詞句を承ける「～として」「～としては」「～としても」のような複合辞も、その表現性の特徴は、「設定」を表す「～とする」表現との連続性、そして、広く「する」を述語とする引用形式との連続性の中で説明

していくことができる。

2-1-3 以上、「いう」「する」を述語とする引用形式からの複合辞への転成について考えてみたが、これらは、「いう」「する」が実質的な意味を稀薄にして、言葉の「持ち出し」「操作」、あるいは事柄内容の「設定」といった、文表現を形作るにあたってなされる主體的な営みにあたることを表していることになることから、おのずと文表現における主體的な関係づけの表現、すなわち、辞的表現として利用されることになるわけである。

### 三、「思う」を述語とする引用形式の複合辞への転成

3-1-1 さて、今度は「思う」を述語とする引用形式に由来する複合辞について見ておきたい。「思う」を述語とする引用形式に由来する（助詞的）複合辞としては、「～と思う」と「～と思えば」「～と思ったら」があり、従来指摘されてきたように、(18)のような（ふつう時間を置かない）継起の関係や(19)のような対比の関係を表すものとして用いられる（なお、「～と」の部分に出てくる文的語列は、「か」

を伴う場合とそうでない場合があり、それがその表現の自然さに微妙に影響してくるが、ここではその点には立ち入らない）。

(18) a 突然ピカッと光った（か）と思うと（／と思えば／）と思ったら、大きな雷鳴が聞こえた。

(19) a マーラーの交響曲は、それこそさまざまな曲想のごった煮状態で、敬虔なコラール風の調べが聞こえる（か）と思うと（／と思えば／）と思ったら、チープな俗謡が出てきたりする。

こうした「～と思うと」「～と思えば」「～と思ったら」は、主語や修飾句を添えることができず、やはり動詞述語としての性格の乏しいものになっている。

(18) b 突然ピカッと光った（か）と私が思うと（／と思えば／）と思ったら、大きな雷鳴が聞こえた。

(19) b ……敬虔なコラール風の調べが聞こえる（か）とふと思うと（／と思えば／）と思ったら、チープな俗謡が出てきたりする。

(18)(19)は、次のようにしても、表す内容としては近似しており、その点から考えても、こうした「～と思うと」「～と思えば」「～と思ったら」は、もはや誰かの具体的な思

考行為を表すものではなく、前件の事柄と後件の事柄を関係づける接続助詞的な複合辞に転じているものと見られる。

(18) c 突然ビカッと光ると、大きな雷鳴が聞こえた。

(19) c ……敬虔なコラル風風の調べが聞こえる、

(一方また) チープな俗謡が出てきたりする。

そして、注意すべきは、既に松木(一九九八)が指摘するように、こうした複合辞として働く「～と思う」と「～と思えば」「～と思ったら」の「～と」に示される内容及び後件の内容は、「反事実」や「未実現」ではなく、必ず「事実」としてある事柄になるという点である。通常の動詞述語句の「～と思う」と「～と思えば」「～と思ったら」であれば、次のとおり「～と」に示される内容が「反事実」であったり「未実現」であったりすることはあり得る。また、以下に出てくる後件の内容が「反事実」や「未実現」であることも、もちろんあり得る。

(20) a 先物取引で損をしたことを、いつまで悔やんでもはじまらない。盗人にあったのだと思えば、あきらめもつくだろう。

(20) b 先物取引で損をしたことを、彼はいつまでも悔やんでいる。盗人にあったのだと思えば、あきら

引用形式の複合辞への転成について

めもつくだろうに。

(21) 主任は、もうすぐ会議が始まると思うと、会議室のドアの外に出て行った。

しかし、複合辞として用いられている「～と思う」と「～と思えば」「～と思ったら」では、(18)(19)に見るとおり、「～と」に示される前件の内容も、以下に続く後件の内容も、「事実」としてある事態でなければならない。いわば、そうした使われ方の限定のもとで、「～と思う」と「～と思えば」「～と思ったら」は、複合辞として働くのだともいえる<sup>3)</sup>。

さて、例えば(18)(19) a が(18)(19) c と近似した意味と解せることからわかるように、複合辞「～と思う」と「～と思えば」「～と思ったら」の「～と」に示される内容は、誰かの具体的な思考・認識ではなく、現前する状況・事態を表すものになっているといえるが、そのようになるのは、次のような経緯によると思われる。「～と思う」と等の「～と」に出てきているのは、右に見たとおり「事実」としてある事態である。そして、「～と」はもともととは引用句であるから、「～と」に示されるのは、もともととはそうした「事実」としてある事態・状況に接してそれを認識・

思考した（と見なされる）コトバであつたはずである。しかし、「事実」（事態・状況）に接して何らかの認識・思考（更に言えば、発言も）が生じるということは、それに対応する「事実」があるということを指し示すものとも解し得る。それ故、認識・思考（あるいは発言）のコトバを引く形で、事態・状況を指し示すような言い方も可能である。例えば、いささか極端な例で次のような言い方があり得るが、

㉔ 「まさか」が「またか」になる。（関口存男（一九六二）の用例）

これは、「まさか」と思うような意外な事態が、しばしば何度もうり返されて「またか」と思うような事態になると解せられるが、それぞれの事態に接して生じる「まさか」「またか」といった思考のコトバ（心内語）を引く形で、それによってそれぞれの事態をいわば提喩的に指し示しているといえるだろう。引用されたコトバが、そうした認識・思考（また、発言）の生じる事態・状況を指し示す表現性を持ち得る点には、まず留意すべきである。そして、「〜と思うと」「〜と思えば」「〜と思ったら」のような形式において、「思う」に誰かの具体的な認識・思考を表す動詞

としての意味が稀薄になることと相応じて、「〜と」に引かれる語列に具体的な認識・思考のコトバを引き写したものととしての性格が乏しくなり、むしろそのような認識・思考を生ぜしめる現前の「事実」（事態・状況）を指し示すものという意味合いを表立てることになるのだと見られる。例えば、(18)の「突然ピカッと光った（か）と思うと」の場合でいえば、「思う」に動作を表す動詞としての性格が乏しくなることと相応じて、「〜と」に引かれる「突然ピカッと光った（か）」も誰かの心内のコトバが引かれたものという性格を乏しくして、このような認識・思考のコトバが心内で発せられるような「事実」としての事態・状況を指すものに移行するのである。

以上のとおり、「思う」を述語とする引用形式は、「〜と」に引かれる認識・思考のコトバの部分が、そのような認識・思考が生じる現前の「事実」を指し表す表現性を持ち得るものであることから、「思う」の意味が稀薄化することで、そのように「思」える「事実」を指し示して、後件の「事実」と関係づける接続助詞的複合辞に転成する。「思う」を述語とする引用形式であることにおいて、既にそのような転成の契機が孕まれていたものといってもいいだろう。

3-2 ここで、「〜と思うと」「〜と思えば」「〜と思ったら」に關していささか補足しておきたい。こうした形式については、馬場（一九九七）が詳しい分析を行っており、馬場はこれらの用法を「継起」「対比」と「反期待」の三つに分けている。「継起」「対比」は既に見た(18)(19)のような用法であるが、「反期待」とは、次のような表現での用法をいうものである（なお、この「反期待」で自然に用いられるのは「〜と思ったら」の形だとも指摘されている）。

(23) a 泣き出すかと思ったら、そんなことはない。平気な顔をしている。

すなわち、「〜と思ったら」で導かれる前件に示される予想・期待に反する内容が出てくるような用法が「反期待」と呼ばれる。しかし、次のように後件にはむしろ予想・期待どおりの内容が出てくる例も十分考え得る。

(23) b 泣き出すかと思ったら、案の定しゃくりあげはじめた。

また、馬場（一九九七）では、「〜と思うと」「〜と思えば」「〜と思ったら」を複合辞と見るべきかどうかという点については、はっきり論じてはいないが、少なくとも「反期待」とされる(23)のような例については、主語を添え

引用形式の複合辞への転成について

ることは出来くはなさそうで、「思う」にまだ動詞性が残っているように感じられる。

(23) c 泣き出すかと私が思ったら、そんなことはない。平気な顔をしている。

確かに、「思う」の主語はもっぱら語り手（もしくは視点の置かれる登場人物）であって、ふつうは表に出てこないが、それでもまだ主語を形として示すことは可能だと思われる。となると、こうした用法の「〜と思ったら」は、まだ十分複合辞化したものではないと見られる。引用形式の複合辞への転成を論ずるこの稿の議論でも、さしあたり除外とすべきであろう。

今一つ、次のことについてもふれておきたい。(18)のような例における「〜と思うと」等については、従来「同時」「直後」といった意味説明がなされてきたが、馬場（一九九七）では、(18) d のように、前件の事柄と後件の事柄の間に時間的間隔のあることが明らかな例があり得ることを指摘し、こうした用法の本質を「継起」だとした。

(18) d 突然ピカッと光った（か）と思っと、やがて（／＼）しばらくして、大きな雷鳴が聞こえた。

この点は、筆者も妥当な解釈だと考える。しかるに、松

木(一九九八)では、こうした例について『やがて』がないと『同時性』の解釈が強く出てきてしまったため、敢えて『やがて』を加えることで『継起』を意識させようとしたとらえた方がよい(一三頁)とし、『と思うと』類の用法の本質的な部分に『同時性』が存在すると考えることは問題ないと思われる(同)と主張している。けれども、これは誠におかしい言い方で、本質的に「同時」なら「やがて」を加えても「継起」になるはずがない。例えば、次の「うやいなや」は本質的にここで言われるような「同時」の関係を表すものといえようが、「やがて」を後件に加えたところで、「継起」になるところか、むしろ不自然になるだけである。

㉒ a 戸を開けるやいなや、彼が入ってきた。

㉒ b \*戸を開けるやいなや、やがて彼が入ってきた。

そもそも「同時」という言い方がミスリーディングで、「うと思うと」等が本当に「同時」の関係を表すのなら、前件と後件を入れ換えても文意は変わらないはずだが、㉒ a の前件と後件を入れ換えた㉒ e は、㉒ a と文意は同じではない。

㉒ e 大きな雷鳴が聞こえた(か)と思うと、突然ピ

カッと光った。

言うまでもなく、事柄の順番が逆になってしまう。このことから理解できるとおり、ここで「同時」といわれている関係は、正確には「直後」というべきものであるが、「直後」というのはすぐ後に引き続くということであるから、「継起」の一種である。そして、「直後」の「すぐ後」の意味を「やがて」等の付加でおさえることが可能だということとは、本質的には「継起」の関係を表すことに加え、多くの場合、プラス・アルファで「すぐ後」という読みが生じる要因が働いているということであろう。

思うに、「うと思うと」「うと思えば」「うと思ったら」に、しばしば「すぐ後」といった意味合いがついて回るのは、「う」に引かれるコトバがもととは認識・思考のコトバであるということが影を落としているのではないか。つまり、ある認識・思考が生じる(人の頭に浮かぶ)のは、それ自体としては瞬時のことであり、(それが指し示す事柄に対し)後件の事柄が続いて起こるものとして示され、間を埋めることが何も示されない場合には、間を置かないで起こるものと読まれる傾向があるのであろう。

以上、「思う」を述語とする引用形式の複合辞への転成

に関連して、「〜と思う」と「〜と思えば」「〜と思ったら」について、二点補足を加えた。

#### 四、結び

4 この稿では、引用形式から複合辞がさまざま生まれていくことには、それなりの所以があることを論じてみた。現代語の複合辞を考えるうえで、こうした議論が一度は必要と思った故である。

なお、次例に見るような複合辞「〜となると」は、「〜と」に文的な語列が来る形で使われ、その用例も次のとおり一部「〜とすると」とも接近してくる。例1 a bは、述べられていることはほぼ同じといえよう。

例1 a 午後から雨が降るとなると、傘を持っていた方がいいな。

例1 b 午後から雨が降るとすると、傘を持っていた方がいいな。

こうした点からも、「〜となると」は「〜とすると」同様引用形式に由来するものと考えるべきかなど、考えるべきことはいろいろありそうだが、「〜となると」について

引用形式の複合辞への転成について

は別稿を用意することにした。

(二〇一五、九、二一 稿)

#### 注

(1) なお、引用形式から複合辞が生じるのは、引用形式の述語が「いう」「思う」「する」といった意味が複雑でない基本的な動詞の場合である。例えば「〜と話す」「〜と考える」のような、発言・思考の意味に少しプラス・アルファの意味特徴が加わった動詞を述語とする場合でも、複合辞は生じていない。従って、引用形式から複合辞への転成の基本的条件としては、述語動詞が基本的にシンプルな意味のものであるということが、まず大前提である。しかし、このことは大前提としておいて特に問題とすることはせず、この稿ではその先を論じることにした。

また、引用形式から転成した複合辞としては、他に「〜ときたら」が挙げられるが、これについては、藤田(二〇〇〇)(四三五頁以下を参照されたい)。

(2) 松木(一九九六)が、引用形式の形をとる複合辞と引用表現の関係を論じているが、この稿で述べるようなことを問題にしたものではない。また、松木(一九九六)は、引用に関して妥当性のない所説に無批判に依拠して論じている点で、その所論自体に問題があり、今日の水準で見れば

採るべきものではない。

(3) 「〜といつても」は、次のaのように、しばしば先行の文を承けて用いられる点で、一見先行の文を引用する性格があるようにも見えるが、b cのようにも使われることからわかるように、必ずしもコトバをそのまま引き写すものではなく、本質的には文意を承けて使われるものというべきであり、引用表現という性格は稀薄になっていると考えるべきでよい。

(ア) a 昨日、出先で車の事故があった。しかし、事故があったといつても、大したことではない。

(イ) b 昨日、出先で公用車がトラックと接触した。しかし、事故があったといつても、大したことではない。

(ウ) c 昨日、林道で公用車がクマを轢いてしまった。しかし、事故があったといつても、大したことではない。

(4) 他に、次のような「理由」の意の用法もあるが、これは後件が受身になっていることで「〜として」に主語が見当たらなくなってしまうことが、複合辞化の大きな要因となっている。

(イ) 規則に違反したとして、注意された。  
詳しくは、藤田(二〇〇三)を参照されたい。

(5) この点、「いう」「する」を述語とする引用形式から転じた(接統助詞的)複合辞は、必ずしもこのようではない。例えば「〜としても」は「未実現」の事柄をごく自然にとり上げられるし、「〜といつても」は「反事実」の事柄をとり上げることもできる。

(ウ) 台風が来るとしても、来週になってからのことだろう。

(エ) 大怪我をしたといつても、あくまでお芝居の中での話だ。心配いらぬ。

(6) 例は、関口(一九六二)の54頁で、  
“Unverhofft kommt oft.”の訳文として示されたもの  
[「」は筆者が付した]。関口(一九六二)は、ドイツ語冠詞に関する独創的な研究であるが、その達意の訳文は、引用研究にとって示唆的であることが少なくない。

#### 参考文献

- 関口存男(一九六二)『冠詞 第3巻・無冠詞篇』三修社  
馬場俊臣(一九九七)「条件表現形式による継起・対比・反期待用法——「(か)」と思うと、思ったら、思えば」について」『北海道教育大学紀要 第1部A人文科学編』四七—二  
松本正恵(一九九六)「引用の形式をとる複合辞について——

引用から複合辞へ——『学術研究（国語・国文学編）』（早稲田大学教育学部）四四（本冊には一九九五とあるが、一九九六年二月刊）

——（一九九八）『思う』を中心とする接続形式について

『学術研究 国語・国文学編』四六（本冊には一九九七とあるが、一九九八年二月刊）

グループ・ジャマシイ（一九九八）『日本語文型辞典』くろしお出版

藤田保幸（二〇〇〇）『国語引用構文の研究』和泉書院

——（二〇〇三）「接続助詞的用法の『トシテ』について——『複合辞』らしきの生まれるところ——」『滋賀大国文』四二）

〈付記〉本研究は、JSPS 科研費（基盤研究(B)「日本語の多様な表現性を支える複合辞などの『形式語』に関する総合研究」・課題番号二六二八四〇四四）の助成を受けたものである。

（本学教授）